シャクナゲの寒暖計

仁木町　久保武夫

私宅の玄関さきの小庭に、日高の山取りと言われているシャクナゲの木が一本ある。

六年程前、これをもて余していた友人から安く頒けてもらったもので樹令はかれこれ二十五年以上は経っているという。

シャクナゲの手入れの仕方を余り知らない私は、植えつけたままの投げ放しであるが年毎に新梢がぐんぐん伸びて、今では地上2メートルを超え自然形に近い樹冠を拡げていて六月から七月にかけては白に近いウス桃色の花を毎年幾十も咲かせる。

その新緑の照葉とピンクの花のとり合せ、殊にそれが小雨にそぼ濡れる佇まいは又、格別でいつとはなしに心が和んでくる。

夏の手入れは怠りがちである私も冬季の積雪による枝折れには少々心を配っている。

先ず太い丸太を数本屋根型に組んで雪の重圧に耐えさせ、小枝は小枝で幾つかに束ねて太枝に結びつけて雪折れを防ぎ更に上からムシロを覆って囲う。

近頃はムシロのかわりに目の荒い金網に変えてみたが、この方が葉や小枝の傷みが少なく効果的のようである。

ところが最近その網目から覗いている冬のシャクナゲの葉が、その日の気温の高低に応じて微妙に変化している状態にひょっと気がついたのである。

十一月も終わりに近づいて気温が7℃～5℃位になると、葉の両側が裏に向かって反転し八つ橋せんべい状になる。

気温が下るに従って次第に葉は巻きこんできて、0℃前後になると人さし指大になり、更に降下して－5℃位には小指ほどで割箸を思わせるようにやや平たくなり、－10℃前後ではエンピツのように棒形に変り、それ以下に気温が降下すると葉の光沢を失いその色も青黒く変り、一本の箸のように細まってさわるとカチカチして砕けやすくなる。

こうしてシャクナゲの葉の表面積を巧みなまでに変化させながら厳寒に耐えている様相は、夏季の開花時のより女性的な姿と比べて異様にさえ思えたりする。

この観察をはじめてから三年目の冬が終わりに近づいた今、寒暖によるシャクナゲの葉の変形具合で冬の気温の凡その見当がつき、言うなれば大ざっぱな寒暖計の役目をすることに気がついた。

今朝、前庭の除雪作業の手を休めながらシャクナゲに近づいてみたら、三月の陽光を一ぱいに浴びた葉は緑のかがやきを一きわ増して、ちょうど葉巻煙草のそれをみるようにふくらんでいる。

そればかりか、とき折「……チチ……チチ……」と聞きとれないばかりの極くかすかな音さえ立てながら……、まるで葉の広がっていくのが目にみえるようである。

近くに設えてある最低最高寒暖計をのぞくと、最低の示度は－4℃、現在3℃、春はそれ程遠くない。

シャクナゲと一しょにそれを待ちわびる私の心は、いつしかシャベルの把手を握りしめていた。（55年3月5日　記）